

史料編纂所所蔵肖像画模本／歴史絵引データベースの課題

藤原重雄 (東京大学史料編纂所)

●はじめに

○[個人研究領域](#)

日本中世史。文化史・社会史。日本中世における絵画史料論 (12～16 世紀頃：年中行事絵巻～上杉本)。
国際日本文化研究センター [共同研究「デジタル環境が創成する古典画像資料研究の新時代」](#) 研究会
「中世史研究における史料画像のデジタル環境—個人的観察—」(2012 年 5 月 13 日、史料編纂所)
「史料校訂に関わるデジタル環境」(楊曉捷・小松和彦・荒木浩編 [『デジタル人文学のすすめ』](#) 勉誠出版、2013 年)

○「編纂」業務の基本的な理解

直接的には、『大日本史料』『大日本古文書』等の [史料集の刊行](#)。

歴史学研究的素材＝史料を調査研究し、諸レベルでの利用可能とする。史料採訪・史料情報の提供 (調査撮影・保存修復・目録書誌解題・翻刻校訂編纂・写真帳・データベース・画像公開)。

現下の状況。人員減・予算減・業務増・後継者難。煩瑣・細切れの説明・成果。組織・事業 (および関係者) の突然死へと至らない、緩やかな縮小への着地の模索。

デジタルアーカイブ・データベース・Web 公開についての、かくある「べき」論の無効性。

各史料が置かれた状況に寄り添った多様性。優先度の自己決定、視野とバランス感覚。(←別の「べき」論…。)
目的や思考ベクトルの相違：理念や理想的状態の実現／史料・作品の理解を深めること、それらモノあるいはまつわる知識・情報を将来に伝えること。作品か、イメージ情報か。

●[画像史料解析センター](#)

○東京大学史料編纂所 (東京大学の附置研) に附属する施設

所内公募のプロジェクトによる個別の調査研究、関連 DB の維持。

「解析」はやや誤解を呼び込む。1997 年の発足時は電算系業務も担当

(→2006 年、[前近代日本史情報国際センター](#))。

前近代日本史研究の視点から、対象となる史料を視野に収め、基幹となる史料ジャンルを扱う。

肖像画、荘園絵図、古写真、文字史料の視覚的・物質的側面 (花押・くずし字)。

金石文拓本、近世絵図、錦絵・刷物、屏風絵、ガラス乾板・採訪記録、その他。

→井上聡「東京大学史料編纂所「電子くずし字字典データベース」の概要と展望」(『情報の科学と技術』65-4、2015 年：[PDF あり](#))、同「史料編纂所所蔵荘園絵図模本データベースと地理情報蓄積システムの連携について」(『画像史料解析センター通信』72、2016 年)ほか。

具体的な調査対象は区々であるが、史料類型ごとに何らかの研究を継続してゆくことで、特定課題の研究に携わるセンターとしての全体性を意識した PJ の認定・予算配分。科研費の申請。

所蔵する画像史料 (各種の複製：模本・写真など) の調査・保存・公開を軸にした研究活動。

○画像関係 DB・閲覧システムと公開範囲 (報告者が些か関係したもの) [\(DB 一覧\)](#)

荘園絵図模本 DB、肖像画模本 DB、歴史絵引 DB 他 (Web 公開/未校正データ/未登録)
一遍聖絵閲覧システム (来館利用のみ、メンバーにもデータなし) [2005 年 9 月公開](#)
洛中洛外図・合戦図屏風閲覧システム (コアメンバー/メンバーに DVD/展示用タッチスクリーン/来館)
東郷荘絵図総合閲覧システム (DVD 一般配布)
近世武家儀礼指図 (DVD 配布: インデックス付き/所蔵史料目録 DB: 画像・簡単な細目)
鷹司本「年中行事絵巻」(本所公開保留→書陵部より画像 Web 公開: 所蔵者指定業者による撮影)
所蔵史料目録 DB、Hi-cat plus (生成した画像を公開するには簡便: 所蔵史料の Web 公開/他機関所蔵史料の来館利用)

○閲覧・公開システムにおける情報・機能付与

閲覧のみ/関連情報の付与/検索機能の高度化/画像利用の仕掛けの組み込み (→プラットフォーム維持のコストが上がる)

スタンド・アローン (単体利用)、来館利用の評価・位置づけ

「マイクロフィルムの閲覧」は研究手段として定着したが、「デジタル画像の閲覧」は定着しない。東博・東文研などでも、図書室でのデジタル画像閲覧、高精細画像閲覧の利用頻度は低い。事例が増えて一定のゾーンを作るか。一方で、アクセス可能性は段階的・階層的にならざるを得ない。〈公開=Web 公開〉への流れ・環境醸成。相反するリスク: 史料の秘匿、閲覧・撮影の謝絶・高額化。理念に基づく「正しい」主張は、史料の利用・公開と後世への継承を疎外する方向へも働き得る。

●肖像画模本/歴史絵引 DB の概要と成り立ち

○概要

・史料編纂所所蔵肖像画模本 DB [\(ヘルプ\)](#) [\(スライド\)](#)

主に明治末年から昭和戦前期にかけて作成した模本類のうち、肖像画約 900 点を対象。

画像データは所蔵史料目録 DB と共通。

模本の書誌的な情報、像主に関する情報、描かれた内容・画賛等、参考文献。

没年、男女子供・法体、身分、賛の有無、キーワードからの検索・絞り込み。

像主略伝は「知の開放」向けの便宜的なデータで、本来は公開停止 (削除) すべきもの。

画像の記述 (ディスクリプション) が一番難しい。肖像画は定型化しており、項目による単語登録で簡易化して全体に付与。

模本の問題点: Web 公開画像としては模本が原本に先行してしまう。

模本のメリット: 一度人の眼と手を通して描く。解釈・整理がなされる (ミスリードもありうる)。

精細画像化の必要性: 肖像画は服飾史の資料。文様などの細部。賛・印章が判読できる画像サイズ。

・肖像情報 DB [\(ヘルプ\)](#) [\(スライド\)](#)

全国に所在する肖像画・肖像彫刻・肖像写真に関する情報蓄積。

自治体史・辞典・図録から、出典ごとに作品 1 点ずつデータ化 (出典の複数ページからまとめる)。

カード取り。像主、作品名、出典、本文項目 (掲載章段)、所蔵者、材質法量、文字情報有無、図版有無 (カラー・モノクロ)、裏面にコピー貼付。

DB化の際に、名寄せ・作品寄せ（作品目録化）を試みたが、未了のままで、未公開データ多数。

・歴史絵引 DB [\(ヘルプ\)](#) [\(スライド\)](#)

画像検索：服飾史・有職故実関係の電子的図典。トレース図の作成、名所（などころ、イメージネーミング）、長めの解説文。知識提供型（史料編纂所 DB では例外的）。

キャプション検索：工具書を中心とした関連書籍の口絵・挿図の横断索引。図中注記・図に対するキャプションもキーワード検索可能。図版自体は持たない。（『古事類苑』は入力休止：[日文研](#)）

※当初は画像検索と語彙検索とが循環する仕掛けとし、利用者による自学自習に供することを目標とした（[旧版ヘルプ](#)参照）。

ぐるぐると廻るが、全体像が見えないため、自分の居場所が分からなくなるデメリット。

主題ごとの書籍の方が入門には適切。画像検索→キャプション検索のみを残す。

○経緯

1992～95 年度科学研究費一般研究 (A) [「中世・近世肖像画の調査・データベース化と歴史図像学的研究」](#)
（研究代表者・黒田日出男）

研究成果報告書(1996 年 3 月)：肖像画模本全点の目録、半数（僧侶を割愛）程度の図版。

肖像画模本約 900 点の調査、撮影（モノクロ）、DB 化（四切焼付→nexusDBnet 画像プロセッサー）。

肖像情報カード 27,000 枚（自治体史・図録・辞典からの情報抽出）→肖像情報 DB へ

黒田編 [『肖像画を読む』](#)（角川書店、1998 年）←1996 年 3 月「肖像画と歴史学」シンポジウム

1997 年：画像史料解析センターの設立、東京大学創立 120 周年 [「知の開放」](#) パビリオン・デジタルミュージアム

模本 300 点（武将など）の記述を充実。像主略伝、画賛テキスト、描かれた内容（主に服飾）の記述。

カラー 4×5 フィルムによる全点再撮影、DB の Web 公開。

画像センターにおける科研費獲得・PJ 継続

歴史絵引 DB の立ち上げ、高精細画像閲覧・研究システムの作成。拡充期。

（中心となった黒田日出男、高橋典幸、佐多芳彦らの異動）

リプレイス時などに生じたシステム・データ上の障害の復旧、維持可能な機能への縮減。

模本全点の Web 公開画像の精細化（フィルム再スキャン・再撮影）

画賛フルテキストの作成（2015 年度完了予定）

* くずし字 DB への文字切り出し。未収録の禅林墨蹟系の文字などをカバー。

「e 国宝」など所外リソースから採取の可能性。パーマネントリンク。

歴史絵引 DB 「キャプション検索」・肖像情報 DB 用データの蓄積

* 辞典的な史料（図絵・図彙）の電子化。所蔵史料目録 DB、肖像画模本 DB の画像から切り出し。

○現段階の構え

便利だが手の込んだシステム設計よりも、テキストベースで維持・継承な情報化を進める。

言葉にする、電子データにする、定義づける（メタ情報を言語化し、それを備えた画像データにする）。

総合的なものを作ろうとしても、構想倒れに終わる。（情報の密度が薄いのか、素材の質がまちまち。）

● 〈名付け〉をめぐる問題

千野香織「言葉とイメージ—物語絵画研究の現在—」(『列島の文化史』7、1990年→[『著作集』](#))

※日本中世史からの絵画への言及の擡頭に対する、日本美術史・絵画史からの反撥の一例。

「言葉とイメージは本来別個のものなのであるから、表されたイメージの全体を言葉に置き換え、両者が過不足なく一対一の対応関係を示すと期待する方が間違っている。」

「この点を特に強調するのは、イメージを言葉に置き換え、その言葉を集積したデータをコンピューターで整理して、言葉からイメージを呼び出す、というシステムが、遠からず利用されるようになるだろうと思われるからである。…しかし、キーボードの操作によってディスプレイ機器の画面上に無機的に並んだ言葉が、実は誰か個人の解釈による著作物であるという意識を、一体何人の研究者が保ち続けられるだろうか。データがコピーされ、その過程で複数の人間がデータを付加するということが繰り返されていけば、もとのデータが個人の著作物であったという色合いはますます薄くなっていく。同時に、誰かがある時点でイメージを言葉に置き換えた、その言葉が、まるでそのイメージの唯一正確な文字データであるような錯覚が、次第に蔓延していくのではなかろうか。コンピューターの操作を繰り返しても文字データそのものが変質してしまうことはないが、それだけに、イメージから言葉に置き換えられた、そもそもの出発点の曖昧さを忘れてはならない。」

※デジタル環境に固有の問題でない事柄をない交ぜにしてしまう議論の甘さ。ただし危惧はそのまま。

黒田日出男「図像の歴史学」(『歴史評論』606、2000年→[『増補 姿としぐさの中世史』](#)平凡社ライブラリー、初出ロナルド・ビズ 1995年英文)

「絵画という史料の性質からして、そこに描かれている〈もの〉や〈こと〉を正確に把握することは容易ではない。絵画史料の利用に慎重ないし否定的な研究者たちは、すぐにそれは「絵空事」であると言ひ兼ねないし、そうした推定・確認についてのいい加減な研究は、絵画史料論や歴史図像学を否定するための恰好の攻撃材料を提供することになる。」

※ことあるごとに「史料批判がなされていない」「方法論が確立していない」という論難。

藤原「絵巻のなかの《伊予簾》」(『月刊百科』407、1996年)

藤原「軒端の鞠—『絵巻物による日本常民生活絵引』のひとこま—」(『非文字資料研究』14、2006年:[PDFあり](#))

○画像と言葉との一対一対応を前提とすることの危険性。

絵画の表現は、過去の森羅万象を扱う。画像記述には水準の多層性。

元の作品の性格、制作・受容の文脈。見る側の関心で〈名付け〉は変わる面もある。

〈名付け〉を支える・背景となる体系。シソーラスは一元的でない。

「絵画史料」研究は、美術史学からの視点のずらしによっても成立。

範囲の限定、趣旨・切り口の明確化、対象の制約。([歴博甲本人物DB](#) は成功例)

○イコノグラフィー、「アート・ドキュメンテーション」との共通性／差異

作品分類：地域／時代／様式／流派／作家

イコノグラフィー：作品を主題・モチーフで分類、記述。

イコノロジー：広範な（比較）文化学の領域へ。imagery 研究。視覚芸術の前提・背景・深層。多義的な解釈を呼び込む造形。関連概念の網の目。アレゴリー、シンボル、古典主題。

研究の方法、手段・ツールとして始まる。自己目的化しない。 [ICONCLASS](#)

ルーロフ・ファン・ストラテン、鯨井秀伸訳・解説『[イコノグラフィー入門](#)』（ブリュッケ、2002年）

（鯨井「[ICONCLASS:イコノグラフィー的分類システム](#)」『情報の科学と技術』58-2、2008年：[PDFあり](#)）

愛知県美術館 コレクション検索 [「主題で探す」](#) [（スライド）](#)

○東洋画題

『歴代名画記』以下の中国の画論、『本朝画史』以下の日本の画論。分類・階層化も。

斎藤隆三『画題辞典』（1919年、1925年、1977年復刊） *五十音順、分類なし。拡張→

金井紫雲編『東洋画題綜覧』11冊（芸艸堂、1941～43年、1997年合冊復刊）

*雨・梅・馬など一般名詞に下位項目あるも五十音順。

台北・故宮博物院の所蔵資料 DB（[典藏資料庫系統](#) > [書畫典藏資料検索系統](#) > 主題） [（スライド）](#)

*描かれた内容の簡単なキーワードを登録（現状ではキーワード検索はできない）。

→いま各所蔵機関が地に足着けて進めるに相応しい業務のヒントになるのでは？

○「絵引」

澁澤敬三・神奈川大学 [日本常民文化研究所](#) 編『新版 絵巻物による日本常民生活絵引』（平凡社、1984年）5巻

神奈川大学 [COE\(非文字資料研究センター\)](#) 編『マルチ言語版 絵巻物による日本常民生活絵引』第1～3巻

『日本近世生活絵引』北海道編、北陸編、東海道編、奄美・沖縄編

『東アジア生活絵引』中国江南編、朝鮮風俗画編

『18世紀ヨーロッパ生活絵引』『都市の暮らしと市門、広場、街路、水辺、橋』

神奈川大学デジタルアーカイブ [「『絵引』原画](#)」（日本常民文化研究所）

*登録キーワードは『新版』での標題のみ。

渋沢栄一記念財団情報資源センター [「実業史錦絵絵引」](#) *対象史料が1点。

○芸能史関係

ジャンルの特性に沿った細かな項目設定、(Web以前の)作品記述方法の定型化。

東京都立図書館 [「TOKYO アーカイブ：浮世絵検索」](#)

早稲田大学演劇博物館 [「浮世絵閲覧システム」](#)

国立劇場 [「文化デジタルライブラリー：収蔵資料」](#)

●「画像データ共有化」？

○現段階（5年10年スパン）で横断的検索、システム的な統合については疑問。

モノ・イメージ自体のコレクション、デジタル化された蓄積の偏り・僅少さ。そこに付与されたテキストはさらに貧弱。インデックスなしで大量の画像 Web 公開の倫理性。

公的機関所蔵、公開を希望する民間等所在の資料の画像データの受け皿。

補助金による文化財修理の報告書作成と画像公開など、個別的に底上げする課題。

たとえば、日文研「[外像データベース](#)」の情報を、かつての日本・アジアの実情としてそのまま利用できない。慎重な史料批判。欧米所在の土産品・輸出向け商品の画像公開によるオリエンタリズムの垂れ流し。史料的価値・限界に対する認識、史料批判・ヴィジュアルリテラシーの意識が吹っ飛ぶ。古典文学の江戸期版本の挿図は、受容レベルの問題を扱う際に利用可能（初学者相手に許容される範囲もあろうが）。

[google 画像検索](#)の結果表示タイプは、現時点での対象蓄積に照らし、学術的機関が行うべき方向か？個別 DB の趣旨、素材の文脈を理解できるように提示する、ゲートウェイ的なもので充分。各 DB の個性・特徴・限界などが、明確に把握される形での連携。答え探しの DB でなく、素材探しの DB。「気づきのきっかけ」としての検索結果を期待する程度でよい。

○画像 Web 公開の罨

予算獲得・執行、数値目標・評価、Web 上の評判。

原本史資料を、研究者による特権的な利用から解放するものであったとしても、史資料と社会とを媒介する能力を備えた利用者へ向き合っていない施策。

原本へアクセス可能な「資格・立場」から、「能力・関心」への転換・移行がうまくいっていない。

DB なり Web を介し、直接に市民個人々人へ利用を呼びかけるべきものなのか。

研究・著作・教育・展示などを通して、市民社会へと戻し、教えを得る。学習・展示コンテンツの制作。

誰もがその気になれば、典拠・詳細データへと立ち戻って検証できる、アクセス可能性を支える。

研究で集めた素材は、原史料であれ書籍であれデータであれ、整理・保存をしてゆく体制の充実。

DB を作るのではなく、素材を利用可能にする形態のひとつとして、Web ベースの仕事。

調査研究保存なき公開活用利用はない。

画像公開が研究や新しい需要を生み出す側面もあるが、偶然に頼り、場当たりの。

視覚的資料を教育的・啓蒙的活動の最前線に動員することの弊害。

藤原「画像資料と歴史研究・叙述・教育」(『岩波講座 日本歴史』列巻二・史料論、岩波書店、2015 年)

【付記】 2016 年 2 月 10 日記/9 月 3 日 Web へアップ

- ・当日配布資料の字句を若干修正し、リンクを付加した。
- ・実際の口頭報告では、5 頁以下の最後の項目については、ごく簡単に、google 画像検索の検索結果表示のような一覧を、人間文化研究機構のデータベースから提供することへの強い危惧を述べるに止めた。
- ・むろんこの部分では、国文学研究資料館（および国立国会図書館）における大規模デジタル化事業を念頭に置いているが、現時点における日本文化研究に関するデジタル環境の一般的な論点ともなりうると考える。

国文学研究資料館からの資料画像 Web 公開については、「周知の如く、システムの能力の問題であろうか、動作速度が実用に堪えられなくっており、評判が芳しくないのは残念である。ただし、これもすぐに改善されることとなろう。」(赤間亮「[立命館大学アート・リサーチセンターの古典籍デジタル化—ARC 国際モデルについて—](#)」『情報の科学と技術』65-4、2015 年 4 月)とあるように、2016 年 1 月 29 日のリプレースによって解消されたと思いが、それ以前の状況においても、実用環境を顧慮せずに公開画像の新規追加が続けられ、現在も例えば、『源氏物語』全帖（書陵部[伏 204]本 2518 コマなど）や『続群書類従』（一部欠で 4644+30285 コマ）が同一フォルダである。実際に DB を利用することのない評価者・世間の評判に向かっているのではないか、あるいはもはや相手は人間ですらなく、計画・目標・評価という仕組みが暴走し始めているのではないか、そうした疑念を人文学研究者として感じるところである。